2025年アイデン
DXビジョン　Ver.3

代表取締役
池内　保朗

2025年9月改定

①経営ビジョン

アイデンの経営目的は
① 社員一人一人の成長 ②制御盤生産による社会貢献である。

アイデンのメイン生産品である制御盤はモノづくりの自動化には欠かすことのできない製品.技術であると共にあらゆるデジタル化のインターフェースとしての機能も果たします。そこでこれまで約 50 年にわたり培ってきた制御技術に新たなデジタル技術を融合し社会の DX 化に貢献していきます。また、DX を進める上で必要となるソフトウエアやネットワークの技術の習得にも力を入れ、社員一人一人のデジタルリテラシ ー向上にも努めていきます。 また、アイデンでは既に制御盤製造の DX として IWS 生産方式を導入し（2020 年 度版経済産業省モノづくり白書にも掲載）、人口減少による人手不足への対応や、電線 くずなどの廃棄物を減らす効果をもたらしてきました。今後さらにこの IWS 生産の DX を進化させ地域、ひいては日本の制御盤技術の競争力強化に貢献していきます。

DX相関図

2019年頃　経営課題

人手不足

技能伝承困難

デジタルを意識した経営方針へ（DX人材の育成）

- **IT投資**
  全社員へiPad
  Microsoft 365導入

- **DXチーム結成**
  朝礼でITﾘﾃﾗｼｰ教育
  常に最新情報を発信

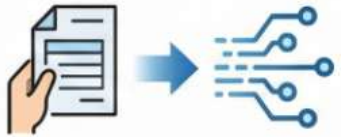
- **DX会議（ﾜｰｷﾝｸﾞ ｸﾞﾙｰﾌﾟ）**
  ｽｷﾙ向上(ｾｷｭﾘﾃｨも)
  導入ｱﾌﾟﾘ検討 等々

- **ｽﾏｰﾄｴｽｲｰIoT/AI 石川ｽｸｰﾙ**
- **AI活用ものづくり研究会(石川県)**

誰でもできる生産方式を新たに考案「IWSの導入」

アナログ値をデジタル化へ

- 配線本数
- 配線経路
- 使用材料
- 配線時間
- 個人の力量



※ 更なる深化へ

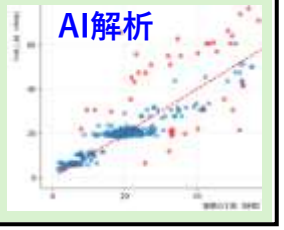
成果２：データ蓄積の促進

- **データベース連携**
  ⇒ 多方面からの分析が可能に！
- **データは経営の財産**
  ⇒ デジタル経営が可能に！

成果１：人材不足解消と海外進出

成果３[未来]：高圧盤ビジネス参入 AIを活用した変革へ

- **既存データを活用しながら、新たな方法で高圧盤製作を！**
- **データを組み合わせAI解析**
  ⇒ 操業度の予測が可能に！
  ⇒ 工数予測システム開発へ



業務のデジタル化

自社開発 Webアプリケーション

社員の工数集計システム（DB化）

i-Core

- **各部の個別業務をアプリ化**
- **社内Excelも含めDB化（脱Excel）**

生産管理システムを刷新
電脳工場DBを他アプリとシームレスに連携

市販の動画マニュアルソフトで職人技をデータ化

②-1 DX戦略の策定

社会的責任としての安定供給を目指す際のリスクは人材不足と生産性の低下である。その解決策として、デジタル化、DXは必須の取組である。アイデンでは業界に先駆け制御盤生産のデジタル化を進めてきました。その成果として生産情報を定量的に収集しています。またバックオフィス部門の生産性向上に向け、AIを活用して自社開発Webアプリを開発しました。このWebアプリでは様々な情報をデータベース化し連携させることにより、これまで勘と経験で行ってきた属人的判断にAIの助言を追加することができ、負荷計画や需要予測といった重要な判断をより正確にできると考えています。

また、DXを経営の根幹とすべく、社内のDX推進部門の格上げ、人員増強も行っていきます。また、AIツール、セキュリティ対策などのIT投資は積極的に行います。

また当社のデジタルに関する取り組みは広くステークホルダーに開示し、情報交換、助言を受け、変化する競争環境に迅速対応できる経営基盤を構築しています。

②-2 DX戦略の策定

1．DX戦略はこれまで同様、自社の競争力の源泉と位置付けトップ自らDX戦略の方向性を示す。また、毎月の幹部会議(SC)での定例報告でDXの進捗を確認する。
2．毎期売上の0.3％をDX投資に振り向けるよう努力する。
3．受注先（顧客）発注先（仕入先）との受発注情報はできる限りデータを利用し、お互いの業務の効率化を進める。ただし、情報セキュリティ関連規程を守ること。
4．社会変化への迅速な対応のため、顧客情報などの営業情報、生産状況や品質状況などを可視化し経営判断に活用する。またDB化を進めAI分析を今後導入する。
5．最新技術、事例活用の収集のため、社員の積極的な外部セミナーへの参加を促し、また自らも参加する。

DXロードマップ

真のDX化への準備は整った！
生成AI で働き方を変革しよう

Next Stage

デジタルトランスフォーメーション
（デジタル化 × 生成AIで働き方を変革）
2026年～
・AI分析で生産性向上、企業体質強靭化
・DB活用でAI工数予測システムの実用化へ
・AI活用によるIWSの更なる深化へ
・高圧盤ビジネスの変革（新たな開発手法へ）
・グローバルDX体制構築（ベトナム連携強化）

デジタライゼーション
2023年～2025年　DX/AI勃興期
　2023年　生成AIが身近に（全社員へ発信）
　2025年　生成AIでWebアプリの **i-Core開発**
2024年　生産管理システム刷新（DB連携促進）
　　動画マニュアルによる技能伝承
　　デジタル主導による高圧盤ビジネス立上げ
2025年　脱Excel化（属人化からデータ共有へ）

デジタル化黎明・基盤構築
2009年　IWS開発
　⇒ 2012年 ベトナム工場へ展開
2019年　IPAD全社員導入、Teams導入
2020年　BIツール、CRM導入など
2021年　ペーパーレス化
2023年　DXチーム発足（業務のアプリ化）
　　⇒ 全社朝礼でITリテラシー教育

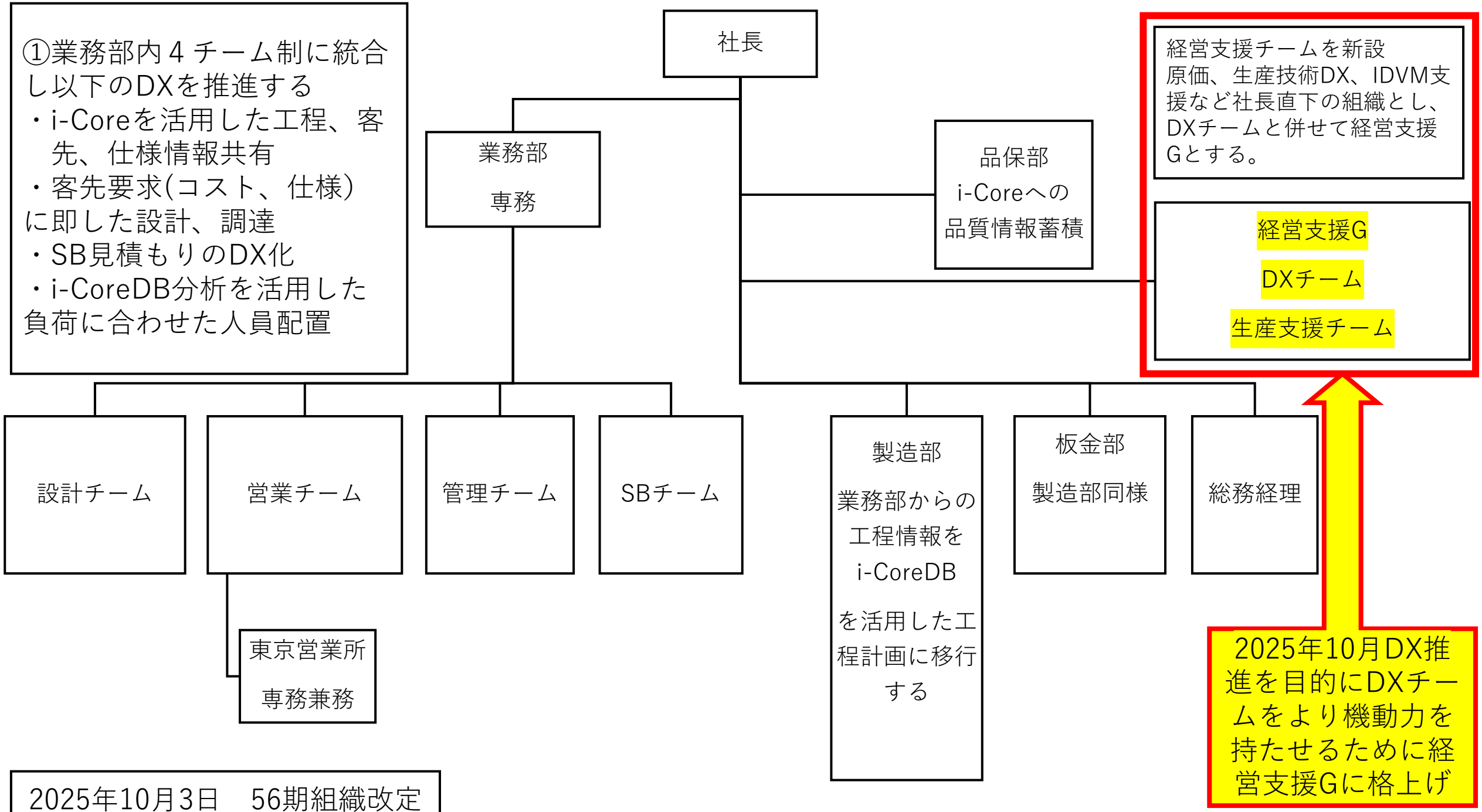
i-Core：業務基盤システム（自社開発）
・各業務をアプリケーション化して統合
・脱Excel/データ一元化（散在データのDB化）
・リアルタイムな経営数値の可視化
・社内のハブ機能として他システムと連携

「守りのDX」から「攻めのDX」へ
足場固め/デジタル化は完了！（ツール導入、データ蓄積）
ビジネス変革へ（更なるAI活用、新規事業、海外展開）

③-1 DX戦略の推進　組織作り

1．社長直下に全社での DX 推進をリードするための DXチームを整備。
更に各部の運用担当者との連携を強化し、DX が業務に確実に貢献するようDXチームに生産支援チームを新設する。（次頁組織図参照）
2．DX人材増やす目的で、石川県主催のスマートエスイースクールへ社員を継続して参加させます。
3．自力では実現できないハイレベルの技術は外部パートナー企業との連係を進める。ただしソフト製作の外注とならないよう、自社のスキルアップに資するパートナーを選定する。
4．DXチーム長は毎月の幹部会議(SC)でデジタルに関する情報発信を行う事。また提供された情報はトップが精査し経営戦略に活かさなければいけない。

①業務部内４チーム制に統合し以下のDXを推進する
・i-Coreを活用した工程、客先、仕様情報共有
・客先要求(コスト、仕様)に即した設計、調達
・SB見積もりのDX化
・i-CoreDB分析を活用した負荷に合わせた人員配置



2025年10月3日　56期組織改定

DXチームの役割

2023年4月に社長直轄の組織として新設

活動指針

1. 最新技術によるDX推進
2. 業務プロセスの抜本的改革
3. デジタル能力の向上

主な業務内容

1. 社内向け業務アプリの開発、保守
2. 社内基幹システムの保守
3. AIに関する情報の収集、活用
4. IT知識の向上に向けた情報発信
5. DX会議の「業務デジタル班」の運営　など
   ※ ITに興味のある人を各部署から募ったワーキンググループ

重点課題（生成AIの最大限の活用）

・AIの最新情報のキャッチアップ
・社員へのAI活用の推進
・AI開発エディタ（Cursor）を使ったチーム内のレベルアップ
・AIを活用した操業度の見える化と工数予測システムの実用化

③-2 DX戦略の推進　人材育成 確保

1．DXチーム員はスキルマップを活用しデジタル技術の向上に努めなければならない。また技術習得のための費用は会社が負担する。
2．DXチームは全社員のITリテラシー向上に向けた情報発信、教育を行う。
社内掲示板を活用した最新情報の発信(適時)　全社朝礼でトレンドの共有など。
3．各部門長はDXに興味ある人材に対し、既存業務とデジタル技術習得が並行して行えるよう配慮すること。（市民開発の後押し）
3．DXチームはDXに関心のある社員を教育、サポートしデジタル人財底上げを支援する。
5．IT人材の採用は年初の採用計画に捉われることなくキャリア、時期を問わず広く募集する。

デジタル人材育成の仕組み

・DXチームが主導でDX会議の業務デジタル班のスキルアップを指導
・DX会議で得た技術や知識をまずは自らが実践（DXチームの支援あり）
・各部署へ身に付けた技術や知識を展開
・各部署内でレベルアップを図る
・DXチームが毎月の全社朝礼で最新のDX/AI情報を発信
・興味のある人を集めて定期的な勉強会を実施（DXチーム主催）

トップダウン型ではなく、**<u>ボトムアップ型</u>**でのDX活動へ
⇒　将来的に市民開発ができる人材を育成することを目指す

将来を見据えたスキルマップ

現状(2025年9月)と３年後の目標

① DXチーム
　3名から4名体制へ
② DX会議　業務デジタル班
　7名から10数名体制へ
③ 全社員

現状（2025年9月）

スキルアップ対象項目	メンバー内の平均値		
	①	②	③
1. AIとの対話/指示力（AIツール活用力）	○	△	×
2. AI協働型アジャイル開発（開発の推進力）	○	×	×
3. 業務プロセスの設計力（システム化の知識）	○	△	×
4. データ分析・可視化力（BIツール活用）	○	△	×
5. クラウド/セキュリティ（AWS・インフラ構築）	○	×	×
6. ローコードツールの活用（市民開発の推進）	◎	△	×

３年後の目標

◎人を指導できる、○支援があれば出来る、△知識だけある、×知識がない

スキルアップ対象項目	メンバー内の平均値		
	①	②	③
1. AIとの対話/指示力（AIツール活用力）	◎	◎	○
2. AI協働型アジャイル開発（開発の推進力）	◎	△	×
3. 業務プロセスの設計力（システム化の知識）	◎	○	△
4. データ分析・可視化力（BIツール活用）	◎	◎	○
5. クラウド/セキュリティ（AWS・インフラ構築）	◎	△	×
6. ローコードツールの活用（市民開発の推進）*1	◎	◎	○

*1　Microsoft 365 Power Platform

③-3 DX戦略の推進　ITｼｽﾃﾑ ｻｲﾊﾞｰｾｷｭﾘﾃｨ

1．OT セキュリティ対策とし、社内のLANを国際規格 IEC62443 に準拠したネットワークへ再構築しました。
2．ソフトウエア、IT機器等のアップデートは情報システム責任者と経営会議で定期的に協議し適切に行う。
3．各部の情報を一元管理できるよう新規の情報システムの導入は極力控え、社内開発のi-Coreにアプリを追加しデータ連携を行う。
4．2024年に社内の「情報セキュリティ関連規程」の初版を制定。
5．最新セキュリティ機器の導入。（次頁参照）
6．社員向けサイバーセキュリティ教育の実施。
7．全社のITシステム全体について、利用状況・老朽化・セキュリティリスク等の観点から分析・評価し、結果を経営会議へ報告し、即座に対策を講じる仕組みを運用する。

アイデンのセキュリティ対策の実施

セキュリティ対策の製品概要

2022年11月導入

出口対策：DDHBOX

標的型攻撃などによるマルウェア感染システムが、感染後に行うC2サーバーへの通信をブロックするシステム。

2025年1月導入

PCのふるまい検知：Sophos EDR

エンドポイントの挙動を監視（セキュアエッジMDR99サービスで使用）。

2022年8月導入

OTセキュリティ：Nozomi Guardian

社内ネットワーク内のあらゆるデバイス(IT, OT)の可視化、脅威の検出、脆弱性の評価。

2025年9月導入

クラウド認証サービス：EVECLOUD

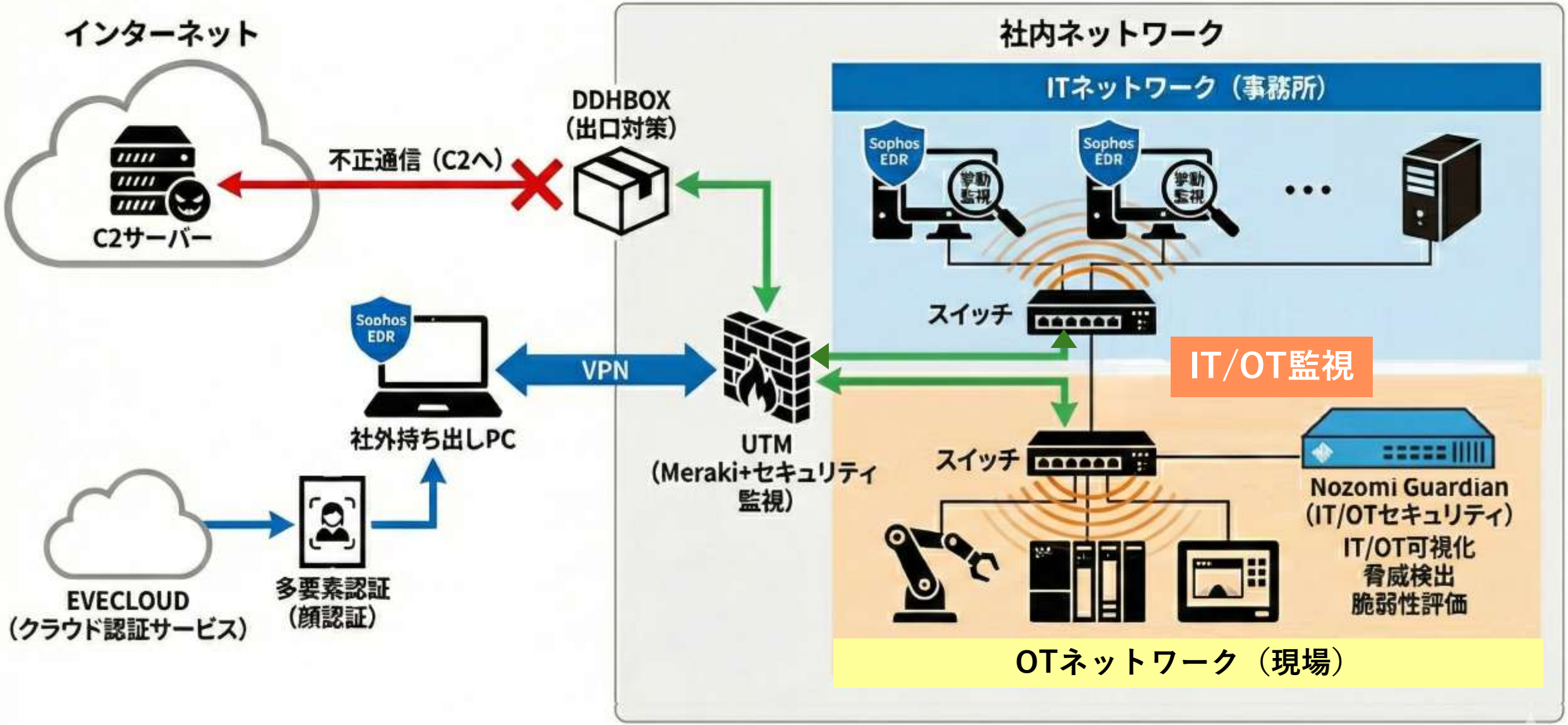
クラウド型多要素認証システム(VPN顔認証)。社外持ち出し対象者のPCログイン時、VPN接続時に利用。

2025年7月導入

UTM（統合脅威管理）

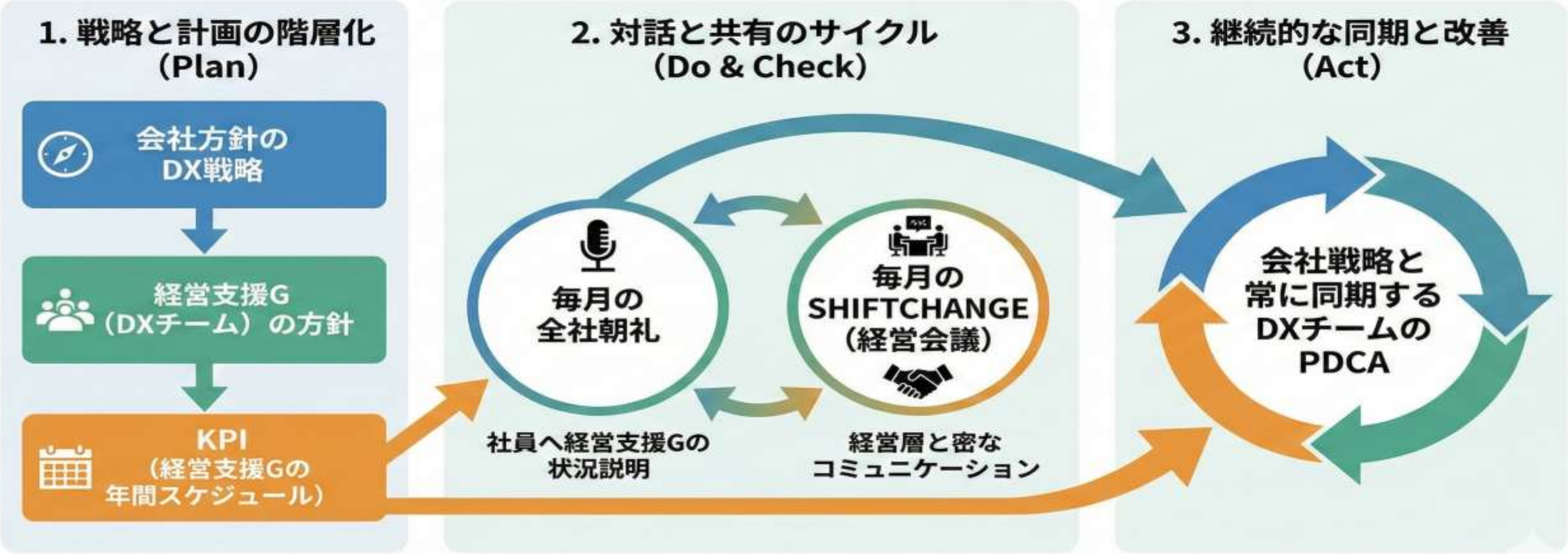
Meraki＋セキュリティ監視による包括的な防御。

アイデンの全体ネットワークとセキュリティ対策（全体イメージ図）



④成果指標の設定　DX戦略の見直し

会社戦略と同期するDXチームの進化と実践プロセス



経営と同期する、DXチームの継続的な進化と実践

DX・AI活用を経営の羅針盤とし、変化に即応できる組織へ
⇒ 高速なPDCAと客観的な評価により、目標とプロセスを動的に最適化し続ける

1．即時性

自社アプリ「i-Core」で経営数値を可視化。**毎月の幹部会**ではデータを基に即座に意思決定を行います。タイムラグのない現状把握により、その場での**軌道修正**やリソース再配分を可能にし、経営判断の質と速度を最大化しています。

2．柔軟性

課題にはAI活用でアプリを即座に改修し、対策をシステム的に現場へ定着させます。また環境変化に合わせ**毎期「DXビジョン」を見直し**、戦略を常にアップデート。変化に即応し、その時々に最適なDX戦略へと進化させ続けています。

3．透明性

期末には活動をQC手法等で定量的に振り返り、KPI達成度を厳密に評価。結果をステークホルダーへ開示し対話することで客観性を確保します。この評価を次期の目標設定へ確実にフィードバックし、戦略精度を高めるサイクルを回しています。

参考　DXチーム　56期タスク一覧

項目	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
予時工数（営業電脳）と実工数（板金、設計、製造）												工数集計システム完成後再構築
└計画時間（製造Excel）の差　※将来的に予時工数をAI予測												
工程会議データをExcelからDBへ　←伴い各部の工程計画作成												
└各部門間の滞留時間　各工程の入りと出の期間を早めることで無駄削減												
受注金額と原価のリアルタイム棒グラフ 受注残　電脳の受注金額と充足率　月別受注金額集計　目標充足率												
在庫金額推移　買いすぎ、滞留の無駄を見たい												
工数集計システムそのままリプレイス												
└機能追加												
高圧盤DX　※情報収集しながら検討を進める												
IWSの深化												
└配線表の自動作成												生成AIの進化に伴い活動・継続
手配指示書、作業指示書システムの構築												
設計チームの対応												
└大型サーボの部品手配の自動化(CSV)												
└データリリース時のショートカットフラグ												
└低圧盤用CAD ⇒ 部品リスト ⇒ 電脳取り込みの為に電脳データを統一												
デジタル技術の社内活用サポート												
作成アプリ一覧確認、取説アプリ	アプリ完成後、都度登録											

⑤ステークホルダーとの対話

社長は定期的な社員ミーティング、役員会でDXに関する課題や取り組みを発信し、啓もう活動やリテラシー向上に努めていきます。
またお客様、仕入先様との面談時にもこれまでの当社のDXの遍歴や今後の課題などを共有し、共にデータ連携の方向性を確認し、次の課題に活かしていきます。
更に金融機関や株主といったステークホルダーに対しても、毎年自社のDXの取組や戦略の今期の進捗状況を広く発信していきます。